

おさづけ拝戴のあと

明治20年頃の「おさしづ」の主題は、本席の立場を明確にすることであった。本席は「おさしづ」を伝える者であり、おさづけの理を渡す者である。増野正兵衛は、本席の側近として、その言葉を取り次ぐという重大な役割を担っており、正兵衛自身もこの頃におさづけの理を拝戴している。以下、おさづけの理を拝戴した後の正兵衛に関する「おさしづ」を見ていきたい。

増野正兵衛は、明治20年5月14日(陰暦4月22日)におさづけの理を拝戴した。その後も、自身の身上の障りを通して断続的に「おさしづ」を伺っている。5月から7月までの割書きは以下の通りである。

- ・明治20年5月16日(陰暦4月24日): 増野正兵衛身上障り伺
- ・5月20日(陰暦4月28日)頃: 増野正兵衛伺
- ・6月24日(陰暦5月4日): 増野正兵衛身上伺
- ・6月28日(陰暦5月8日)八時十分: 増野正兵衛身上障り伺
- ・7月3日(陰暦5月13日): 増野正兵衛伺
- ・7月4日(陰暦5月14日): 増野正兵衛伺
- ・7月13日(陰暦5月23日): 増野正兵衛足首の伺
- ・7月17日(陰暦5月27日): 増野正兵衛右の腹痛み伺
- ・7月20日(陰暦5月30日): 増野正兵衛身上障り伺
- ・7月23日(陰暦6月3日): 増野正兵衛体内あちらこちら疼くに付伺。神戸へ帰る事に付伺。春野千代身上悩みに付伺
- ・7月26日(陰暦6月6日): 増野正兵衛身上障り伺

これら一連の「おさしづ」について、気づいた点を順に記していきたい。

明治20年5月16日の「おさしづ」では、正兵衛の身上の障りについて、「心に掛かるは、めんへ身に掛かる」と、定めた心を動かさないようにと諭されている。

6月24日の「おさしづ」では、「取次」について述べられた箇所、「成程の道、こうなる纏まり、談示々々水の席火が出る、火の席に水が出る。そこで水の席に水、火の席に火を以て、いかなる処、談じ置かねばならん」とある。神の言葉には万人に通じる普遍性があるが、それを取り次ぐ場面では「水の席に水、火の席に火」と、聞き手に応じた取り次ぎ方が説かれている。

6月28日では、「さあへ分からん処には、何ば誠説いても誠とせん。何ば貫ぬこうと思っても、関があつては登れん」と、神の話を「誠」として受け取らない人の場合について述べられている。そうした人の心には「関所」のようなものがあるが、「関は神が取るのやで。関さえ取れば、登れるであろう」と説いて、取次者が根気よく話を取り次ぐことが促されている。

7月4日の「おさしづ」では、「道の道なら道のため一つ思案、

なれども案じが強うてならん」と、道のために思案する中に、先案じの心が強くあることを指摘されている。

7月13日頃、正兵衛は足首を痛めたようである。そのことについて伺うと「身の内だんへ身の障り、尋ね事情、身障り、中の一つ治め方、だんへ障り知らせてある」と、身上の障りを通して、神意を読み取るようにと諭されている。

その4日後の7月17日に右腹が痛み出したことに対しては、「どういう事、どうかこうか治まる処分難ない」や「内なる処又日いかなる処の心もある」と、内々の者に神の話を伝えて納得してもらえる日もあれば、そうでない日もあることが伝えられている。

7月20日の「おさしづ」では、「又一々その所、めんへ国一つ長くへ心ある尋ねから、談示一つ処纏まらねばならん」と、国元の人々との談じ合いをまとめるようにと諭されている。

7月23日では体内のあちらこちらが疼くことについて伺うと、「皆ひながた出してあるで。道々、通らにゃならん道が見える」とあり、ひながたの道を参照するように諭されている。また同日、神戸へ帰ることについて伺うと、「どのくらいの事、いかなる処ふでさきほんに聞いた通り」や「案じて案じ、案じには切りが無い」と、「おふでさき」についてふれながら、先案じする心について注意されている。

またこの日は、春野千代(正兵衛の妻いと義姉)の身上の悩みについても伺っている。「救けとうてへ、一つ道を通らねばならん。救けて貰いたいへ。一時救け出けん。」と、人をたすける心になるように促されていることがわかる。

7月26日、再び正兵衛の身上の障りに関して伺うと、「天然自然の道というものは、一つ踏んだら一つ、二つ踏んだら二つ、三つ踏んだら三つ。これは一寸も動かん。これが第一の処がある」と、天然自然の摂理にそって順序よく一步一步事を進めるようにと諭されている。

以上、増野正兵衛がおさづけを戴いた後、およそ2カ月の間の「おさしづ」について見てきた。この間のお言葉を全体的に見ると、家内の人々が神の道を歩むことに対して逡巡しており、正兵衛が心を砕いている様子が窺える。親神は、人々の先案じする心を再三指摘しつつも、あくまで皆が談じ合いながら心一つにすることを求められている。そして、その中心人物である正兵衛に何度も身上の障りを与えていると拝察される。

正兵衛自身おそらく気が急くこともあっただろう。7月26日の「天然自然の道というものは、一つ踏んだら一つ、二つ踏んだら二つ、三つ踏んだら三つ」というお言葉が印象深い。また、こうした一連の流れを踏まえるならば、6月24日の「そこで水の席に水、火の席に火を以て、いかなる処、談じ置かねばならん」と、前もって相手に応じて伝えることの大切さを伝えられていることも意義深く感じられる。